



TITLE:

<大會抄録>宋代の歸明をめぐるって

AUTHOR(S):

上西, 泰之

CITATION:

上西, 泰之. <大會抄録>宋代の歸明をめぐるって. 東洋史研究 1995, 54(3): 556-556

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154534>

RIGHT:

大會抄録

宋代の歸明をめぐる

上 西 泰 之

宋代に於いて州縣化された内地のうち、西・北・西南の周邊少數民族の接点である沿邊域では、軍事的緊張關係から種々の問題を包含したことは、周知の通りである。宋代において、異民族の歸服者をいう語については、歸明や歸朝があり、一旦異民族に仕えて戻つて來た者をいう歸正などとともに史料に見える。

北宋中期以後の邊境への積極的進出・開拓によつて、彼らを如何に處遇するかが現實問題として浮上し、その中でも兩宋を通じて頻出する歸明に對しての具體的な規定を、より詳細にする必要が生じていった。これらは後にまとめられ、例えば、南宋に於いて『慶元條法事類』蠻夷門に見える諸規定などになつてゆく。

本報告ではこうした規定の萌芽期の狀況を探るとともに、彼ら紛争の胞子となる要素に對し、宋朝側がどのように對處しようとしたのか整理分析し、特に彼らの生活に係わる諸種の規定を検討したい。

北京特別關稅會議と中國海關

小 瀬 一

近年、海關についての研究が進展し、海關が中國史上で占めた特異な地位が明らかになりつつある。特に一九二〇年代は、海關組織が中國の政治・經濟に對して最も自立的に對應し得た時期として注目される。海關の自立的傾向は、關稅が内外債の擔保にあてられ、中國内外の諸勢力の利害の焦點となつたことに始まる。このことは諸勢力の均衡の上に海關組織を押し上げることを結果した。特に辛亥革命以降、關稅管理についての總稅務司の權限が強化されて以後、海關組織・總稅務司の發言力がたかまることとなつた。その一方で海關は、内外からのまとまつた財源である關稅への諸要求に直面することとなつてゆく。

海關をめぐる議論は、一九一〇年代以來その管理する關稅の配分をめぐる展開されたが、二〇年代後半からは中國側の關稅自主要求も加わり、複雑な様相を呈するようになる。ここでは從來の關稅餘款處理の問題に加えて、關稅管理の在り方も問われることとなつた。一九二五年末からの北京特別關稅會議の開催は、これらの海關についての議論が交錯する契機となつた。本報告では中國の世論が關稅自主要求へと傾斜する情勢を背景に、イギリス本國と出先機關との間で行われた論争、さらに海關總稅務司アグレンの見解に注目し、當時の海關がおかれていた位置さらに中國政治の狀況について検討を加えたい。